



TITLE:

張家口通信

AUTHOR(S):

森

CITATION:

森. 張家口通信. 東洋史研究 1938, 4(2): 175-175

ISSUE DATE:

1938-12-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145632>

RIGHT:

以上の如くである。この兩文化遺跡の性格を區別さして考へ、斯様に、まとめあげ、更に實年代を、はつきり考定せんとした意企は、主として著者の一人水野學士の考察のやり方である事が自ら理解されてくるのである。調査報告の類とはいひ乍ら、我々一般讀者から見ても本書の中には將來の東亞先史文化の考察に様々な教示をあたへて呉れる箇所が少くない。考古學的遺物に見る牧民の生活の必然性、或は積極的年代の不明な北方系櫛目文土器の下限の問題等、又本書に呈示されたる諸遺物の美事な圖葉附きの説明、或は著者獨自の考察には將來に残された様々の問題を藏してゐる様に思へるのである。とまれ東亞考古學に於ける文化の性格の既に「滿蒙新石器時代要論」或は江上氏との共著「內蒙古長城地帶」等で概觀された著者の一人水野學士が、更にこの赤峰にて、實際に則した成果をあげられた事は慶賀の至りである。讀者は暑い夏休に一片の土器をも捨つる事なく整理されてゐた水野氏の姿と本書の出版に敬意を表さねばならない。思へば昭和二年の貌子窩の大發掘以來、こゝに甲種第六冊目の報告を世に出した東亞考古學會の學界に於ける功績も

亦今や世界的になつたと稱さねばならないであらう。

〔藤岡謙二郎〕

張 家 口 通 信

今張家口にも「日軍廣東入城」のアドバルーンが碧空高く揚つてゐます。實は小生一週間前から蒙疆地區をあちこちしてゐます。十六日北京を發つて十七日早朝大同着、雲岡に行き、十八日朝飛行機に乗せて貰つて（生れはじめの経験です）包頭へ、機上から黃河も眺めました。言語に絶する壯快さでした。その日は包頭泊り、翌十九日は厚和のラマ寺を一巡して同處で泊り、二十日厚和發、大同を素通りして張家口へ、翌日張家口外元寶山麓へ、この邊の長城や蒙古人の市を開く所などを見て又西郊の賜兒山へ上る。今日は再び城内の各所を見て廻りました。明日はこゝを發つても一度大同へ歸ります。葉書には書き切れぬ色々話がある。云々。森鹿三

（十月二十三日發、日比野宛）